

「宏子ちゃん！ 頼むよ！」

佐賀県 池田 宏子

一 教師への道

昭和十九（一九四四）年の夏、だんだん戦争が激しくなってきた、若い方がどんどん出征して行かれた。

母たちは、白い割烹着を着て国防婦人会のたすきをかけ、出征兵士を見送りに行くのが日課のようになっていた。それでも兵隊さんが不足するのか、学校の若い先生方も次々と応召され、後の補充をつけるのが大変だったらしい。父はそのころ、小学校の校医をしており、今で言う父母会の会長でもあった。

ある日、校長先生がいらっしやって「若い先生が応召され、後の補充がつかなくて困っている。お宅のお嬢さんを学校に出してはくれませんか？」と相談があったそうだ。父は校長先生の立場がよく分かるだけに、むげに断ることもできず「何とか説得してみましよう」

ということだったらしい。私は夕食後、父母に呼ばれた。「宏子、学校の先生にならないか」「いやよ。師範学校にも行っていないし、教え方も知らないもの」「教え方は、校長先生が指導して下さるそうよ。この際、学校に勤めて勉強をして、教師の免許を取っておいた方が良くなくて？ 結婚して、もしもご主人が戦死したとしても、免許を持っていれば何とか生活していけるじゃない。よく考えてごらんなさい」と言う。母の言葉に「それもそうだな、今どきどんなことが身に振りかかってくるかも分からないし、教員の免許をとっておくのも悪くないな。今のまま父の病院に勤めていても、自分のためにならないし……。私は、暇なときには、よそのお子さんを借りてくるくらい子供が好きだし、思い切って学校に勤めてみようか？」と翌日両親に言った。すぐに、校長先生から十月一日に学校に来てほしいとの連絡があった。

十月一日には、朝早く起き、緊張して学校へ行った。校長先生は、「成瀬さんには、小学二年生の担任をお願いします」とおっしゃった。二年生の学年主任の先生

が校長室にみえたが、四十代後半のひげの濃い男の先生だった。「教室にご案内します。一時間目は私が修身の授業をしますから、教室の後ろで見ていて下さい」と、さっそく教室に行く。紹介していただいたが、体中の血液が頭へ逆流したような感じで、何と言ったやら覚えていない。一時間目の授業は、何が何だか分からないうちに終わってしまった。「さあ、二時間目の算数は、ご自分で授業してください」と言い残して、さっさと行ってしまわれた。まさか、一日目から授業なんて思ってもいかなかっただけに、面食らってしまった。もじもじしていると、児童の目が私をじっと見ている。絶体絶命、二年生の算数ならどうにかなるかもしれないと、教壇に立った。教え方なんてめちゃくちゃ、冷や汗たらたらで、授業が終わるとどっと疲れがでた。これでは大変と、翌日からは教科書や教師用の参考図書を持て帰り、藁をもつかむ思いで調べた。でも、そう簡単にいくものではない。校長先生は、授業の仕方は教えてあげるから、心配しなくてもいいとおっしゃっていたが、一度も教えてはくたさらなかった。

た。

とうとう一週間目に、思い余って校長室に行った。「校長先生は、教え方は指導するから勤めてほしいとおっしゃいましたが、何も教えていただけませんでおっしゃいます。何も分らない私に担任された児童たちが、かわいそうです。こんな有様では、私は教師はできませんので、今日限りで辞めさせていただきます」これには校長先生も目を丸くされ、「明日の授業の教科書を、全部持っていらいっしょい」と教え方を指導してくださいました。

それから二カ月ばかり、毎日放課後に教えていただいた。今になって考えてみると、校長先生もお忙しいのに大変だったろうと思う。でも、私も、何とか早く一人前の先生になりたいくて必死だった。指導技術なんて何も知らない私に担任された児童は、いい迷惑だっただろう。児童は担任を選ぶことはできないのだから。今なら、父兄からの苦情がくるだろう。あの当時の児童たちは、もう七十歳を過ぎているはずだ。もし出会うことがあれば、お詫びをしなければならぬと思う。

昭和二十年六月末に、教員の免許をいただくことができた。でも、その六月に父が亡くなり、後を追うように母まで亡くなってしまった。引き揚げて来て、その免許で弟妹を養い育てていくようになるうとは、夢にも思わなかった。

二 空襲

「ウー！ ウー！」と不気味な空襲警報のサイレン。急いで防空頭巾をかぶり、重要書類の入ったかばんを持って出る。いよいよ奉天も空襲されるようになったのかと、複雑な気持ちだった。これは、訓練ではないのだ。先生方の顔も、緊張で引きつっているようだ。何事もなければいいがと、祈るような気持ちで学校前の防空壕に入る。皆押し黙ったままだ。防空壕といっても、大人の背の高さぐらいの深さに長方形の穴を掘り、屋根は板を渡して、上に土を十センチメートルぐらいかぶせただけのものだった。大人が四、五人も中へ入ると、もう身動きができない。あんな防空壕に入ると、一体何を防げただろうと、今考えると哀れになる。

昭和二十年の春ごろだったと思うが、記憶は定かではない。私が十七歳のときで、児童は登校していなかったから、春休みだったのではと思う。防空壕に入ってから間もなく、B 29の爆音がしてきた。B 29は見たことはなかったが、爆音を聞き分ける訓練を受けていたのですぐ分かった。爆撃するとすれば、連京線（大連―新京）と安奉線（安東―奉天）の分岐点か、東洋一の機関庫だろう。

私たちの入った防空壕は駅から近いので、爆弾が頭の上に着てくるかもしれない。「死んでしまうかも？」と思うと、母や弟妹たちはどうしているだろうかと不安がよぎる。だが、そんな気持ちとうらはらに怖いもの見たさもあって、防空壕の入り口の屋根の無い所に移動する。B 29の機影が見えてきた。三機編隊が二組だったと思う。今までに見た飛行機よりも、ずっと大きい。近づくとつれて、その威容がはつきりしてきた。爆音も大きくなる。もう爆弾を落とされるか、今落とすかとびくびくしながら見ていた。遂に頭の上まで来たが、爆弾は落ちなかった。もう真上まで来た

ら大丈夫、爆弾を落としてもここには落ちない。安ど感から防空壕を出てB 29をよく見た。お日様の光にきらきらと反射して、とてもきれいな。青空もその美しさを助長しているように見えた。「あつ爆弾？」と思わずじやがみ込む。ばらばらと次から次へと放物線を描いて落ちていく。「ここで落としたりどこへ落ちるのだろうか？ あのたくさんの爆弾が落ちたらどうなるだろう」と思い、背筋がずうんと寒くなった。

空襲警報解除になって、ほっとした気持ちから、B 29のことを話題にしながら家に帰った。

翌日、学校に行くと、「昨日の空襲で、〇〇先生のお母さんが亡くなった。買物に行かれた途中で空襲警報が鳴り、連京線のガードの下に避難したところがガードの入り口に爆弾が落ちて、爆風にやられてしまったんだって」それを聞くと言葉が出なかった。手も足も硬直したようになって、動けなくなった。〇〇先生が「B 29はきれいだね！」と言ったとき、相槌を打つたことを思い出した。今でもあのときのことを思い出すと、〇〇先生のお母さんに申しわけなかったと思う。

その次の空襲のときだった。いつものように防空壕に避難するとB 29は奉天の方から飛んで来た。ただ一機だ。編隊を離れたのだろうかと思つて見ていると、日本の戦闘機が二機飛んで来た。そのうちの二機は旋回して、B 29の方へまっすぐ飛んで行く。あんな方向に飛んで行つたらぶつかるのにと、手に汗を握る。「あつ、危ない。方向を換えてっ！」と思わず声が出る。声など届くはずがないのに、叫ばずにはおられなかった。あつという間に、戦闘機はB 29の横か後ろにぶつかったらしい。大きな火の塊が見えた。大きな爆発音がした。怖くて足ががたがた震える。思わず目をつぶる。あつちこつちの防空壕から、「やったぞ。B 29が落ちて行くぞー」の声が聞こえる。おずおずと目を開いて見ると、B 29の破片がばらばらになって、それでもきらきらと輝きながら音もなく落ちていく。戦闘機のかげらしいものは見えない。無意識に手を合わせる。涙が頬を伝つて落ちる。

ラジオや新聞で「体当たり」という言葉は知っていたが、ショックだった。きつと、私よりいくつか年上

の若い航空兵が乗っておられたらうに。「国のため国民のためと、ためらわずに突っ込んで行かれたのだろう。有難うと言うべきなのか」とも思ったが、あまりにも痛ましく悲しかった。でも、あのがつしりしたB29に立ち向かうには、あの方法しかなかったのかも下の方で炸裂していた。かつて、飛行場に勤労奉仕で行ったときの仕事は、錆びた弾の錆び落としだった。そのときに戦闘機を見せてもらったが、布をのりでばんと張ったような素材で造ってあった。B29にはとてもかなわなかっただろう。

三 お父さんが守ってくれた

昭和二十年八月十五日、玉音放送を聞いた。ザアザア雑音が入ってお言葉がはつきりわからなかったが、日本は戦争に負けたのだということはわかった。私は当時十七歳で、奉天市蘇家屯小学校に代用教員で勤めていた。「撃ちてし止まん！」「一億総決起！」「打倒鬼畜米英！」「ほしがりません勝つまでは！」など職員室の壁に貼ってある薄汚れたスローガンが空しく見え

た。「日本が負けた！ 神風なんて吹かなかった。負けてしまったのだ？」と思うと、ひとりでに涙がこぼれてくる。学校から家に帰るまでも、涙が止まらなかった。家に着くなり、「お母さん、日本が負けた」と言っ

てしゃくりあげた。母は「もうこれで戦争は終わったよ。夜も電灯に黒い布をかぶせないで明るくできるのよ！」と言って涙も見せなかった。私は、何だか拍子抜けしてしまった。母は戦争に負けても良かったと思っているのだろうか、と、反発さえ感じた。

「とにかくにも、戦争が終わったのだ」という、ほっとした気持ちも長くは続かなかった。私がたったの十カ月勤めていた小学校も接収されることになり、何となく不安な街になってきた。

医者をしていた父は、その年の六月六日に亡くなったが、悲しんでばかりはいられないような情勢だった。父が亡くなって三カ月ばかりは、そのまま大きい家に住んでいた。しかし、母と子供だけでこんな大きな家に住んでいるのは不信心だった。それで、三部屋に台所、風呂場というこじんまりとした家に引っ越した。

でも、家財道具が入りきれず、外に掘つ立て小屋を建て、今すぐ必要でないものはそこにしまっておいた。

ソ連軍が進駐して来た。年ごろの娘は、ソ連兵に乱暴されたり拉致されたりするというわさが伝わって来て、当時十七歳の私の同級生は、ほとんどの人は丸坊主になり男装した。でも、私はそれどころではなかった。母が病気になつて寝こんでしまった。父が亡くなつて収入はなく、私のわずかな給料も、学校を接収されてからは途絶えてしまった。当分生活できるだけの貯金はあつたが、銀行が閉鎖してしまつて当てにはならなかつた。病気の母と十五歳、七歳、三歳の弟、十二歳の妹と私の六人の生活費を何とかしなければならず、母の看護に末の弟の世話と、どうしてよいか分からぬような毎日となつた。

今までは「院長さんのお嬢さん」と皆から言われ、家にはねえやもボーイもいた。自分で言うのも面映いだが、恵まれた生活をしていた。それが急転直下どん底に落ちたようなものだった。生活費は家にあるものを食つて得ていたし、弟たちは母に栄養のあるものを食

べさせるため、食料品の調達に走り回つた。

そのころ、隣組の組長さんがお金を集めに來られた。「ソ連兵に、若い娘が乱暴されないようにするため、クラブにソ連兵を相手にする女の人をおくようになつた。ついては、その人たちに差し上げるお金を集めに來ました」そのころの私は、よく意味が分からなかつた。病床の母に言う、「出しておきなさい」と言われ、何がなんだかわからないままにお金を渡したが、金額は覚えていない。私はその意味が分かつたのは、結婚してからだった。

ソ連兵を相手にした女の人たちはどうなつたのだろう。何人ぐらいたのか。お金を出してソ連兵の相手させ、自分の娘を保護するという考え方に後ろめたさもあつたが、社会とはそういうものなのかと、もの寂しい気もした。でも、そうしたことが必ずしも効果があつたとは言い切れなかつた。

ソ連兵は夜になると家に押し入つては、目ぼしいものを取つて行くというわさがたつていた。それで上の弟と二人で、上等の衣類や宝石などを天井裏に隠す

ことにした。押入の上段に上がって、天井板を一枚ずらして天井裏に入るのだ。荷物を上にあげるとなると大変だったが、弟と一緒にがんばってくれたので、どうやらできた。そして、ソ連兵が家に入って来たときは、いつでも天井裏に隠れることができるようにその押入は天井裏に上がり易いように片付けた。

ところが、ある家では娘さんが天井裏へ逃げ込んだら、ソ連兵は天井裏に向かってピストルを撃ったそうだ。幸いなことに弾は当たらなかった。それを聞いて、

私は天井裏に隠れるのを止めた。もしソ連兵が表から入って来たら、裏口から逃げる。裏口から入って来たら表から逃げるように決めた。「宏子姉ちゃん、僕が茂夫や英夫や道子の面倒をみるから、一人でさっさと逃げるんだよ!」と上の弟と手筈を決めて、私は夜になると枕元に洋服と靴を置いて寝ていた。昼間は、ゲー・ペー・ウーか上官が目を光らせているとみえて、あまり来なかった。ときには、両腕に時計を六、七個もはめているソ連兵を見かけたりした。腕時計が大好きで、壊れた時計でも、もらうと大喜びではめいていた。

ソ連兵が、隊列を組んで歩いて行くときはすてきだった。一人が歌の一フレーズを歌うと、それについて皆がコーラスで歌い始める。歌いながら隊列を組んで行進して行く。きれいな男声合唱だ。日常茶飯事のように、さあつとコーラスができるのが何とも驚きだった。そのころは軍歌ばかりで、外国のきれいな曲も敵国の歌と禁止されていたので、そのコーラスはとてもすてきに聞こえた。私は立ち止まって聴くことがよくあった。

ところが、そんな感傷に浸っていることができないような事が起こった。いつものように、枕元に洋服と靴を置いて寝た。ひそひそと人の声がする。布団の中で聞き耳を立てると、それはロシア語である。思わず手を握り締める。どうぞ家の前を通り過ぎて行つてと祈るような気持ちで、全神経を耳に集中させて聞いていたが、だんだん家の玄関に近づいて来る。さてはと思ふ間もなく、玄関の前でびたりと止まった。足音からして四、五人のようだ。「ダワイ! ダワイ!」と言いながら、玄関の戸をたたいたり引つ張つたりする。

私はいよいよ来たかと、弟の方を見た。弟も体を起こして、手で逃げるように合図をしている。私は「どきどきどき」とする胸を抑えて、すばやく洋服を着て靴をはく。幸い、小さい弟や妹は眠っている。母は弱々しいがしつかりした声で、病床から「宏子ちゃん、家に踏み込んで来たらすぐ逃げなさい。そして、知っている人の家に入れてもらいなさい。しつかりするのよ」と言った。

ソ連兵が必死で玄関の戸を引つ張っているが、幸いに戸が開かない。それもそのはず。私と弟で玄関に突っ張り棒をしているからだ。直径十センチメートル、長さ三メートルぐらいの棒を、玄関の戸に斜めにロープでくりつけていたのだ。棒の端は、戸の上の壁の所まであるので、玄関のドアの上の壁ごと引つ張らなければ開かないようになっていた。私たちはじつと息を潜めた。胸の鼓動が聞こえるようだ。品物は取られてもかまわない。逆らわずに、ほしだけ持つて行かせよう。だがみんなの命だけは助かってほしい。「ふにやふにや」してはおれない。私がしつかりしなければ

と覚悟を決めると、いくらか落ち着いてきた。ドアを蹴り出したが、その音が胸に大きく響いてくる。突然音が止まった。「よかった。諦めたかな」と思う間もなく、今度は裏口に回った。「しまった。裏口には突っ張り棒をしていなかった。もう駄目だ」どんどん叩いたり、引つ張ったりしている。と、大きな音がした。ああ、戸が壊された。いよいよだと思い、窓から逃げようと窓に手をかけたときだった。馬の蹄の音がした。ゲー・ペー・ウーが見回りに来たのだ。略奪をしているところを見つけられたら、その場で射殺されるといふことは聞いていた。早口でロシア語で叫ぶ声が聞こえると、バタバタと走って行く音がして、急に辺りはシーンと静かになった。夜はしらじらと明け始めている。「助かった」と思うと体中の力が抜けてしまったみたい、しばらくはだれも口をきけない。「良かったねお父さんが守ってくれたのよ!」と、ぼつりと母が一言。感無量だった。

夜がすっかり明けてから外へ出てみると、玄関の戸は突っ張り棒のおかげでびくともしていなかった。裏

口は、鉄の取っ手が根元からぼつきり折れていた。もう少しゲー・ペー・ウーの来るのが遅かったら、どうなっていたらと思うと、背筋がずうんと冷たくなってきた。「掘っ立て小屋に道具をいっぱい入れていたから、狙われたのかもしれないね。家が金持ちと思われるなんて？」明るい笑い声が家の中に満ちていった。

四 報怨以德

昭和二十年、秋のある日だった。遠くで銃声が聞こえた。「何だろう」と思っていたら、略奪や乱暴をしていたソ連兵がいなくなった。「ああ、良かった！」と思つたのも束の間、今度は国府軍が蘇家屯にやって来た。国府軍は乱暴なことはいないから安心だという町のうわさが流れてきたが、本当だろうかと半信半疑だった。そのころの我が家は大変だった。母の病気は一向に良くならず、ほとんど寝たきりの有様。生活費は、家のめぼしい物を売って得ていたが、売れる物もだんだん少なくなっていく。十五歳の弟は、私の様子を見兼ねてか、今でいうアルバイトを始めた。十二歳の妹

も「私もおまんじゅう売りをする」と言つて、首からおまんじゅうの入った箱を下げ、街角に立ったり、あちらこちらと歩き回つて売つて歩いた。おまんじゅうは、朝おまんじゅう屋さんに行つて分けてもらつて売るのが、売れ残つたらどうしようもない。ある日、たくさん売れ残つた妹は、父が病院長をしていた病院に行つた。すると、看護婦さんや事務の人、薬局の人までが「院長さんのお嬢さんが、かわいそうに！」と競つて買つてくれたらしい。妹は、帰つてから得意になつて、寝ている母の所へ行つて話した。「今日、おまんじゅうがたくさん残つていたので病院に行つたら、みんなが買つてくれたよ」寝ていた母は、顔色を変え、厳しい口調で「何てことをしてくれたの。いくらおまんじゅうが残つていても、病院にだけは売りに行つてはいけない。そのように人の好意に甘えてはだめよ。病院には一切売りに行かないこと。わかつた？ いいわね！」妹は褒められこそすれ、叱られるなんて不服そうにしていた。意味はよく分かつていないようだったが、母の強い言葉に黙つて引き下がつた。

とはいうものの、私も弟もおまんじゅうが売れ残った日のことを気にかけていた。弟は売れ行きの悪い日には、自分の小遣いを下級生に渡し、「妹のまんじゅうを買って来い」と言つて、自分は物陰に隠れていた。私は「おまんじゅうが食べたくなつたから、うちに十個ちょうだい」と買つていた。だから、あまり生計の足しにはならなかつたが、妹の気持ちだけは有難く受けていた。

私は、母の看病と七歳、三歳の弟の世話で一日を過ごすのがやっとだった。青く晴れ渡つた日のお昼ごろ、片付けものをしてしていると、裏口からぬうっと一人の国府軍の兵隊が入つて来た。すわと身構える。私を見つけると、部屋に入つて来た。私の顔を見るなり「お金がほしい。お金をくれ」と言つた。兵隊の様子を見ると、私より三、四歳ぐらい年上のように見えた。グレーのよれよれの軍服を着ている。乱暴をするようには見えない。一度お金をあげると、それに味を占めて再三来られても困ると思つたが、お金をやらなくても、私を殺すような殺気はなさそうだと判断した。「うち

は父が六月に亡くなり、母も病気で子供ばかりだ。こんな有様だからお金はない。お金をほしいと言つたが、お金をもらつてどうするの?」「お酒を買いたいのだ」「あ、それならお酒が少しあるから、それを持って行きなさい」ちようど一升瓶に六、七合ぐらい入っている日本酒があつた。どうせ家に置いていても飲む者はいないので、戸棚から出して一升瓶ごと渡すと「謝々」と言いながら、その兵隊は一升瓶を抱きかかえて、弾むようにして帰つて行った。

それから数日後、今度は友だちらしい兵隊を連れて二人でやつて来た。「今日は遊びに来た」と家の中に入り、珍しいものを見るようにきよろきよろと辺りを見回していた。まず、オルガンの上に載せていた「ママ一人形」に目をつけた。そうっと手を伸ばして取ると、寝かせたような格好になり、次に起こしたものだから人形は目をパチツと開け、「ママ」と泣いた。二人はびっくりして歓声をあげて、何度も何度もかわるがわる「ママ」と泣かせた。それを見ていると、戦争をするような兵隊とはとても思えず、あどけなさの

残る顔がいじらしくさえあった。下の弟たちは、大の男がママー人形を泣かせて遊んでいる姿を唾然として見ていた。

心ゆくまで人形と遊んだ二人は、今度はオルガンに目をつけた。オルガンの蓋を開けると、ストッパーが十二個ついている。「これは何か」と言うので、「どのストッパーを引き出すかによって、音が変わる」といって弾いてみせたが、今度はオルガンをめちやくちや弾いた。

しばらく遊んで帰るとき、今日初めて来た兵隊が、「ママー人形がほしい。くれないか？」と真顔で遠慮がちに言う。その真剣さに負けて、「そんなにほしいのなら、あげる」と言うのと、歓声をあげ、赤ちゃんを抱くように大事そうにして持って帰りかけた。ちようどそのとき、妹がまんじゅう売りから帰って来た。「姉ちゃん、ただいま」と言う声に、「あれはだれか？」と聞くので「妹だ」と言うのと、まじまじと妹の顔を見つめて帰って行ったが、それからが大変だった。

毎日、妹がまんじゅう売りから帰って来るころを見

計らっては、ママー人形を持って帰った兵隊が家に来るのだ。妹の名前を覚えていて、「道子はいるか」と家に入って来る。妹が帰っていると、話をしたり一緒に遊んだりしている。帰って来ていないと、帰るまで待っている。始めは気にも止めていなかったが、あんまり毎日のように来るので、気味が悪くなってきた。もしかして、妹を連れて行かれるのではと、心配になってきた。母も病床から「少し気をつけた方がいいよ。道子ちゃんと会わせないようにしたら」と言った。妹に、「帰って来たときに兵隊が来ていたら合図をするから、友だちの家に行くように」と言い含めておいた。

その二、三日後だった。「今日は、妹は用事があるので、泊まってくるかもしれない」と言うのと、私を相手に話し出した。「困ったな。早く帰ってくれないかしら。でも、怒らせたらどんなことをされるかわからない」と思って相手になっていた。「僕の名前は、段龍光。僕たちは、専門学校を卒業した者ばかりの部隊だ」道理でと思った。なぜなら、話がややこしく通じなくなると、お互いに漢字を紙に書いて話し合っていたか

らだ。蘇家屯の中国人の全部とは言わないが、文字を知らない人が多かったからだ。「僕の出身地は〇〇だ。僕の故郷は、日本軍のためにひどい目に遭った」「うそ！日本の兵隊さんはそんなことはしない！」「でも、本当だ。あなたたちは知らないかもしれない。だけど本当のことなんだよ。僕の父や母、それに妹も日本軍に殺された。その挙げ句、家も焼かれてしまった」「うそだ！うそだ！」「うそだと言うのも無理はない。そんなことは公表しないだろうし、信じられないのも当たり前だ。悲しいことだけど、事実なんだよ。でも、その仕返しをあなたたちにしようとは思わない。仕返しをしても、またあなたたちに怨まれるだけで、妹たちは生き返らないのだから。悲しむのは僕だけでたくさん。『怨みに報ゆるに徳を以ってす』だよ」このことを話す段龍光はしんみりした口調で、とても悲しげな表情だった。真実を言っている目だった。「うそだ」と大声で言っていた私だったが、だんだん声が小さくなり、日本の兵隊ってそんなことをするのかしらと、半信半疑の気持ちになってきた。

その日はそれで帰ったが、母にそのことを話すと「殺された妹さん、もしかしたら道子ちゃんと同じ年齢ぐらいだったのかしら」と言った。私もそうかもしれないと思った。へんに勘ぐったりして悪かったと思い、それから妹と会わせないようにはしなかった。ときには、お菓子を持って来て妹と一緒に食べたり、中国人街に連れて行って食事をしたりしていた。「お母さんが元気を出すように」と病気の母に豚肉を持って来て、料理までしてくれることさえあった。「戦争がすんで故郷へ帰るときは、妹を連れて行って北京大学へやるのだ」と張り切って言うこともあった。

すっかりなじみになったころ、突然来なくなった。どうしたのだろうと心配していたら、国府軍は八路軍に追われて退却したのだ、といううわさが流れてきた。同じ中国人でも、八路軍は略奪がひどかった。兵隊ならともかく、将校が空のトランクを持って家に入ってきて、ステッキの先でポンポンと品物を選び分け、トランクに詰めて帰った。引揚げの準備として、父の形見の品を入れていたリュックサックを持って行かれた

ときは、泣くに泣けなかった。

五 引揚げ

昭和二十一年六月末に、いよいよ引揚げが開始されるとの連絡があった。一年前に父を亡くし、後を追うようにして亡くなった母。一年間のうちに両親を亡くし残された子供たち。私は十八歳になっていた。弟は十六歳、妹は十三歳、それに七歳と三歳の弟の五人で内地に引き揚げるのだ。

持つて帰ることのできる荷物は、一人にリュックサック一つだけということだった。三歳の弟には、帯芯で肩から下げる幼稚園バッグの大きさの袋をミシンで縫ってやった。その袋には、弟が食べるお菓子を入れてやるようにした。七歳の弟は、遠足用のリュックサックに下着程度、妹はせいぜい自分の衣類ぐらい。荷物をまともに持たせるのは、上の弟と私だけだ。そのたった二つのリュックサックに、全財産から選んだものを持つて帰るのだ。十六歳の弟が、白い布に筆で名前を、分からなくならないように濃くはつきりと書く。それを私がリュックサックや袋に縫いつけた。持つて

帰るものを選ぶとき、父や母の着物なんてどれが良いものか、てんで分からない。母が、「お父さんと一緒に買いに行ったら、もったいないみたいの高い着物を選んでくれて」と言いながら嬉しそうに着ていた、モスグリーンにくすんだ朱の漆が入っていた着物を手に取る。母が好んで着ていたお召し、父の紋付、仙台平の袴を選ぶ。着物を選びながら、母の着物は母の匂いがすることに気付いた。母の着物に残る、かすかな母の匂いに顔を埋め、「どうして子供たちだけを残して死んでしまったの」と恨みたくなるようだった。私も一緒に母について、あの世とかに行きたいと思った。でも、母が亡くなる時、「宏子ちゃん、すまないけれど弟や妹のことを頼むよ！」と、あえぎあえぎするようないで言った母の気持ちを考えると、すっかりしなげればと思うものの涙が滴り落ちる。着物に残る母の匂いに包まれていると、気持ちが悪く落ちてきて、こんなところを弟妹に見られては大変と慌てて顔を洗いに行っていたのだ。昭和二十一年五月十七日に母が亡くなってから、一カ月経つか経たないかくらいのころだっ

た。「大きい姉ちゃん」と呼ばれ、母親代わりの私は弟妹の前ではめそめそすることはできず、明るくしゃんとせざるを得なかった。

母は、病気になって寝込むようになってから、とも内地へ帰りがついていた。お骨だけでも日本へ帰って帰らなければと、弟が父の遺骨を、私が母の遺骨を抱いて帰ることにした。お寺に預けることもできたが、二度と踏むことができないであろうこの地に、両親の遺骨を置いて帰る気にはとてなれなかった。お骨を入れる袋も帯芯で作り、肩から下げられるようにした。弟の手を引いて行かなければならないので、両手はあけておいた。迷子にでもなったら、それこそ一大事だ。

引揚げのときに持って帰る写真を選んでみると、走馬灯のように思いが交錯する。両親が健在だったころの、物心両面に恵まれ、幸せを絵に描いたような生活、終戦後の暴行や略奪に怯えた日々、そんなことを考えると、子供ばかりで日本へ帰ってどうなることだろう、と思うようになった。

そんなある日、知人が中国人に頼まれて来たと言っ

て話し出した。「子供たちだけで引き揚げるのは大変だろう。特に三歳の弟さんは、足手まといになるだけだ。幸い、中国人の△△さんの家には子供がいない。

弟さんを育てさせてほしいと言っている。日本人で、しかもお医者さんの子供なら、先々立派に成長して、自分たちが年老いたときの面倒をみてくれるだろう。ただでとは言わぬ、二千円差し上げたいがどうだろう。承知してくれないだろうか」私だって、引揚げのときどんな困難なめに出会うかもしれないし、日本へ帰ってどんな生活ができるか気にならないと言えばうそになる。母は亡くなる前に言っていた。「内地へ帰ったら、山林や田畑があるので、それを少しづつ売れば十分生活していけるし、宏子ちゃんや俊之ちゃんの学費にも困らないだけはあるから」でも、山林や田畑がどのくらいあるのか、どれとどれが家のものなのかも知らない。そのころ、三歳の弟はいつも私と寝ていた。うとうとし始めると、必ず私のおっぱいをまさぐり、探し当てると母親と寝ていると錯覚を起こすのか、深い眠りに入っていくのだった。そんな弟を、足手まといに

なるからといって満州へ置いて帰ることはできない。

弟が歩けなくなつて、みんなについて行くことができなくなれば、それはそのときで考えることにしよう。

「リュックサックを背負い、お骨を胸に抱き、三歳の弟を連れて帰るのは、並大抵のことではないかもしれませんが、でも、弟を置いて行くことはどうしてもできません。中国人の方には、はっきりとお断りしておいて下さい」と返事する。小さい弟や妹には内緒にしていたが、十六歳の弟にだけは話した。弟も「英ちゃんを置いてなんか行けるもんか」と即座に言ってくれた。

母がよくはめていた指輪は、ぜひ持って帰りたいかった。特にダイヤ、ルビー、オパールの指輪が好きだった。形見の品だからと思つたが、貴金属は持つて帰つてはいけないという指令が出ていた。年齢を重ねた今の私なら、どうにかして持つて帰つただろうけれど、まだうぶだった私は、もし見つかつて他の人に迷惑をかけてはと、一つも持つて帰らなかつた。押入に隠したままの指輪はどうなつただろうと、ふと考えることがある。幸い父の往診かばんは、小村さんの小父さん

が「私は残留するから、お父さんの往診かばんは預つておいてあげよう。私が引き揚げるころには、恐らく規制も変わるだろうから、持つて帰つてあげるよ。お父さんの大事な形見だものね」と預つて下さつた。引き揚げのとき、他人の荷物まではとても無理だと思つたが、その温かい思いやりの気持ちが有難くて、涙がぼろつとこぼれたことを覚えている。

いよいよ引き揚げの日が迫つてくると、今度は一週間の食糧の準備だ。日持ちのいいものを作らなければならぬ。弟と相談して天火でスポンジケーキをいくつも焼いた。おにぎりは、焼きおにぎりにした。今考へても、よくやったものだと思つても思つても、それこそ、必死だつたからできたのだろう。日本へ持つて帰ることができるとは、一人千円ずつだった。でも、途中でどんなことがあるかもしれない。売れるものは売つて、お金に換えた。でも、中国人は引揚げでどうせ持つて帰ることができないと分かっているため、品物は安くしか買わなかつたが、何とかゆとりを持つただけのお金が準備できてほつとする。

昭和二十一年六月二十六日。いよいよ引揚げの朝、きれいな空が恨めしかった。私はお骨を胸に抱き、リュックサックを背負う。ずっしりと重く肩に食い込むようだ。三歳の弟の手を引き、家を出る。思い出の多いこの地を去る寂しき、子供たちだけでの引揚げの不安、万感胸に迫り、立ち去り難い。鍵をゆつくりと掛け、心の中で「さようなら」と何度も言う。

家を出て、五メートルも歩いただろうか、最近、家の裏に引越して来た医学生とか聞いていた青年が、ぱあっと走って来た。気が付かなかったが、どこからか私たちが家を出るのを今か今かと見張っていたらしい。あつという間に戸を開けた。中に入ったと思うと、すぐに医学の原書や医学書を運び出した。いつの間にも用意していたのか、リヤカーに積んでいる。次から次へと運んでは載せ、運んでは載せしていた。それを目の当たりに見た私はショックだった。声も出さず、足も釘付けになったみたいで進めない。「こんちくしよー！」と、立ち戻ろうとする弟を止める。はっと我に返り、集合時間に遅れてはと後ろ髪を引かれる思いで

そこを立ち去った。父の大切な本を思うと悔しく、また引揚げで一冊も持って帰れないことがみじめで情けなく、複雑な思いが体中を駆け巡るのだった。しかし、そのときふと思いだった。家の中には、貴金属も衣類も家具もあつたのだ。それらには目もくれず、真つ先に父の医学書を持って出た中国人。あの人なら父の本を読んで勉強し、立派なお医者さんになってくれるだろう。父の医学書は、後輩を育てるものでもあつた。日本人でなくても、中国人のお医者さんになりたい人が活用してくれるなら、亡き父もきっと喜んでくれるのではと思った。日本人も中国人も、分け隔てなく診察していた父だからと思うと、わだかまりがすうっと消えて気が楽になった。

家の中の物は、我勝ちに根こそぎ持って行かれてしまっただろう。でも、もう後は振り返るまい。今から日本に帰るまで、どんなことが待ち受けているか分からない。とにかく、弟や妹を無事に日本に連れて帰らなければ、亡くなった父や母に申しわけない。

十五分ほどかかって、やっと集合場所の蘇家屯駅に

着いた。小隊長さんの人員点呼に私は、「はいー」と大きな声で返事をしながら、全力を尽くして弟妹を無事に連れて帰るぞ、と覚悟を新たにしていた。集合が終わると、隣組の組長さんの指図で行動を始める。ホームには貨物列車が着いていた。牛や馬を乗せたものか、荷物を載せたものか分からないが、中は茶色で薄汚れている。隣組毎にまとまって乗る。人間が、荷物と同じように貨車に乗せられるなんて、考えたこともなかった。荷物のリュックサックをおろして真ん中に寄せ、人間は回りに座る。父や母と一緒に満州内を旅行したときは、一等車に乗せてもらっていた。『あじあ号』の展望車などは、素晴らしかった。今は、傷がついてでこぼことした床にじかに腰を下ろしている。惨めで情けない。これが戦争に負けたということか。でも、歩いて行けと言われるよりはました。

北奉天で全員降ろされた。今晩は北奉天の収容所で泊まるのだという。駅から収容所まで歩かなければならない。欲張って持つて来たリュックサックの荷が重く、肩に食い込む。三歳の弟の手を引いて、首には母

の遺骨を下げている。これでは長歩きできないと思つて、道端でリュックサックの中から一番不要と思つたものを取り出し、そこに置いた。妹が心配して「姉ちゃん、それどうするの」「重たくて持てないから、ここに置いておくの。ほしい人が持つて行くでしょう」そうするよりほかに仕方がなかった。

私が三歳の弟を連れてくるものだから、中国人が寄つて来る。子供を売れというのだ。小さい子供が一人でうろうろしていると連れて行かれるというので、私は弟を絶対に側から離さなかった。七歳の弟にも「兄ちゃんや姉ちゃんの側を離れて、勝手に行ってはダメよ」と、よく言い含める。

着の身着のまま寝る。食事は持つて来たお握りで済ませた。

翌朝、葫蘆島に向かって出発。列車は無蓋車だ。途中で雨が降ったらどうなるのだろう。列車に乗り込んだのに、なかなか発車しない。と、団長さんと隣組の組長さんがホームから私を呼ぶ。何だろうと列車を降りて行く。「機関手が、時計をくれなければ列車は発車

させないと言っている。誠にすまないが、お父さんの時計を出してくれないか！」私は「どうしようか」と思った。父のウォルサム懐中時計は、戦時中の供出で側のプラチナを出した。父の衣類は八路軍の将校が持つて行つてしまった。父の形見のロンジンの腕時計は、たった一つの形見の時計だ。出したくなかった。でも、列車を動かしてくれなければ引揚者が困る。それに、私たちは子供ばかりで引き揚げるのだから、いつ皆さんに迷惑を掛けることにならないとも限らない。父も許してくれるだろうと、洪々ながら父の時計を差し出した。時計が私の手から離れるとき、身を切られるような思いがした。団長さんは、ほっとした顔で「有難う！」と言つて機関手に渡しに行つた。列車は間もなく動き出した。そのときは、「これで良かったのだ」と自分に言い聞かせた。

幸い雨には遭わず、夜は星月夜だった。あの星は父、この星は母と自分で決めて「どうぞ私たちを守ってください」と祈るのだった。列車は、動いては止まり、止まつては動くの繰り返しだった。止まったときは、

襲われはしないかと怖かつた。心配することがあまりに多かつたせいか、どのくらい無蓋車に乗つていたのか覚えていない。

葫蘆島の収容所には三日間ばかりいた。社宅だつたとみえ、長屋が続いていた。三歳の弟が下痢をしだし、ここでもしものことがあつてはと必死だつた。持つて来た梅肉エキスを飲ませた。そこへ中国人が白米のお握りを売りに来た。べらぼうに高かつたがそれを買ひ、お粥を作つて食べさせた。どうにかひどくならずにはつと一息ついた。

いよいよ乗船の日となる。テントを長く張つてある所で、荷物の検査があつた。大したことはなく、こんなことなら母の指輪を持つて来れば良かったと、心残りになる。船は貨物船で、デッキから急な階段を降り船底みたいな所に入る。窓も無く、蒸し暑い。妹は、暑いから甲板で寝たいと言うが「甲板で寝るのは男の人だけ」と止める。七歳の弟はあまり丈夫ではなかったが、よく言うことを聞き、てこずらせることはなかった。三歳の弟は、自分の小さなバッグに入つている

お菓子を少しずつ楽しんで食べていた。

「舞鶴の港が見えてきたぞ！」だれかの叫ぶ声で、みんな甲板にあがった。平和な山の緑を見ると、目が潤んできた。日本へ帰ることができた。兄弟五人揃って日本の土を踏むことができる。「お父さん、お母さん、日本に帰って来たよ！」と両親の遺骨に語りかけた。検疫のために、すぐには上陸できなかったが、目前に舞鶴を眺めながらの一日は、落ち着いた気持ちで過ごすことができた。

列車を乗り継いで、やっと父の家に着く。玄関横の百日紅がピンクの花をつけていた。玄関を入ると、父が留守を頼んでいた大叔父、大叔母の驚いた顔。「まあまあ、きつかったろう。よう帰ってきたね！」と口では言っているが、当惑気味な表情がありありと見えた。しかも、大事に大事に持って来た両親の遺骨を見て、「宏子ちゃん、お骨は全部持って来たのけ。ちいどけ持って来ればよかったとけえ」と言った。思いやりの気持ちだったかもしれない。でも、どんな気持ちで持って来たのか分からないのだろうか。両親の遺骨は、

骨壺でなく火消し壺に入れて、お墓に入れられた。何だか悪夢を見ているような気がしてきた。

六 引き揚げ後

終戦後の混乱の中で、日本へ帰ったら何とかなると思い我慢しながら引揚げを待った日々だったが、日本へ引き揚げてからはもっとみじめだった。唐津市〇村の父の名義の家は、決して居心地の良い所ではなかった。食事の差別もあつたし、リュックサックに入れて持って来た荷物の中から、布地が消えてなくなったこともあつた。父の家の留守を頼んでいた大叔父に家は取られ、広い山林も田畑も不在地主で失ってしまった。近所の人が見るに見兼ねて、「裁判にしたらどうか。いつでも証人になってあげるよ！」と言つて下さったが、引揚げで持って帰った一人千円ずつのお金しかなかったし、どうにもならなかった。結果的には兄弟ばらばらとなった。まず、十三歳の妹の道子が、呼子の父のいとこの所に引き取られて行った。親しいお付き合いをしていたからだろう。そこのおばあさんが道子をかわいがつて、教えることはきちんと教えて下さった。

でも、学校の費用をもらうときは、なかなか言い出せなかったと今でも言う。つらかっただろうと思う。数カ月に一度くらい私の所に来ていた。せつかく来てくられても、何もしてやることができず、好きな本を一冊買ってやるぐらいだった。私の所に来るのが楽しみだったと言ってくれた。長男の弟は、ここにおいておく」と近所の目もあり、家も田畑も自分のものにはできない。そのため、大叔父は有無を言わず船員にしようとした。私は「よく考えて」と弟に言ったが、「こんな家にはおりたくない。この家を出て行けるならどこへでも行く」と行ってしまった。仕事に慣れまでは大変だったろうが、幸い船長さんにかわいがっていただき、ほっとした。七歳の弟は、母方の伯父で久留米で医者をしている家に預けられた。

○村の家には、三歳の弟と私だけが残った。それも三カ月ばかりだった。私は、父のいとこが嫁いでいる旅館で、子守り兼女中として住み込みで働くことになった。やっと四歳の誕生日を迎えたばかりの英夫を一人残してのことだった。二歳で父を、三歳で母を亡く

した英夫は、両親の顔すら覚えていない。頼りにしているのは、姉の私だけだった。わずかな荷物をリヤカーに載せて○村を出るとき、「英ちゃん、姉ちゃんは町まで行ってくるからね。お利口さんにしといてね」と言うと、こつくりと頷く。弟の顔を見ないようにして、走って家を出る。ずつと帰って来ないとも知らずにと思うと、涙がぼたぼたとこぼれ落ちた。

旅館の人は、みんな私をかわいがってくれた。クラシック音楽の好きな私に、「宏子ちゃん、おいで。レコードを聴こう」と誘ってくれたりした。でも、子守りと食器洗いばかりしているうちに、○村の大叔父が、だった。そうこうしているうちに、○村の大叔父が、「博多の川端通りの店の方が、養子をほしがっておられる。英夫をやったらどうか」と言って英夫を連れて来た。「少し考えさせてほしい」と言って英夫を連れて海へ行く。砂浜で貝殻を拾ったり、二人で追いかけてこをして走り回ったりした。ひと休みして海を眺める。どこまでも続いている広い海、ゆったりと打ち返す波。いつになったら、広々としてゆったりした気持ちにな

れるのだろうか？ 院長さんのお嬢さんと言われている私は、今どん底に近い生活をしている。五人の兄弟が揃うことさえできない。なんで、両親は私たちを残して死んでしまったのだろうか。恨めしい。私も死んでしまいたいと思った。父や母のいる所へ行きたいと思った。砂浜から公園の裏の方へ回る。ちょうど崖のようになっている所から下をのぞくと、大きな岩がごろごろしている。「そうだ。死んでしまえばいいんだ。つらいこともなくなる。英ちゃんも一緒に連れて行こう」かがんで英夫の両手を取り、まじまじと顔を見詰める。英夫は私の異様な気配を直感したのか、突然私の腕を力いっぱい引つ張って「大きい姉ちゃん、帰ろう。お家へ帰ろう」と大声で泣き叫んだ。その声に、はっとする。母が今わの際に、「宏子ちゃん、すまないけれど、茂夫ちゃんや英ちゃんのことを頼むよ！」とあえぎあえぎ言った言葉が頭をよぎる。死んだ気でやれば、何をしてもつらいことはないかと思ひ返した。

その後、呼子の叔父の世話で、山の中の小さな小学校に勤めることができるようになった。下の第二人を引き取って暮らし始める。私が勤務している間は、宿直室や運動場で遊ばせていた。ときには、そうつと教室に入って来ることもあった。そんな私たちを、村の人々や同僚は温かく見守ってくれた。財産とて何一つないこんな私に、結婚を申し込む男性がいた。その人が今の夫である。弟と離れて暮らすことはできないからと、一旦は断ったが、「何も一人で苦労して育てなくてもいいではないか。二人で育てれば……」と思いがけない言葉が返ってきた。その言葉に甘えて、中学生と小学生になった第二人を連れて結婚した。夫二十八歳、私二十七歳のときである。

夫は「弟たちは、財産は何もないのだから、せめて学問なりと身に付けなければ」と、第二人とも大学まで行かせてくれた。もちろん私もずっと勤めを続けたが、弟たちを大学へやるときは、家計が大変だった。でも、夫は何一つ文句を言ったことはなかった。どんなに感謝しても感謝しきれないと思っている。

その弟たちも、呼子に預けた妹も、船員になった弟も、今ではそれぞれに結婚をして幸せな家庭を築いて

